

# 平成19年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ニギス

学名 *Glossanodon semifasciatus*

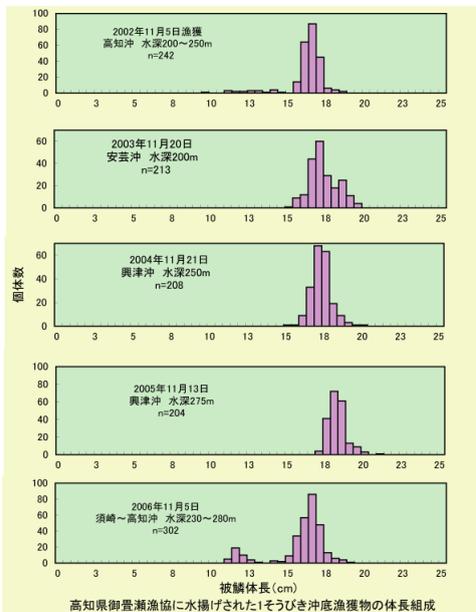
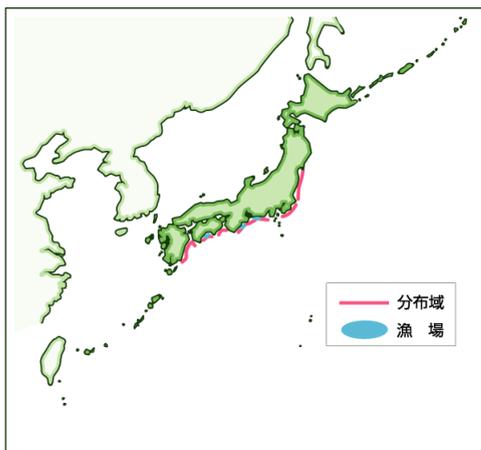
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 3歳  
 成熟開始年齢: 2歳  
 産卵期・産卵場: 主に春季(3~4月)、秋季(11~12月)にも産卵、水深250m前後の海底付近  
 索餌期・索餌場: 春~秋季(5~11月)、金華山以南~九州太平洋沿岸の水深100~350mの海域、成長に伴い沿岸からより沖合の生息域に移動  
 食性: 幼魚期は主にコペポダ、成長に伴いオキアミなどのより大型の浮遊性甲殻類  
 捕食者: 中・大型の底魚類

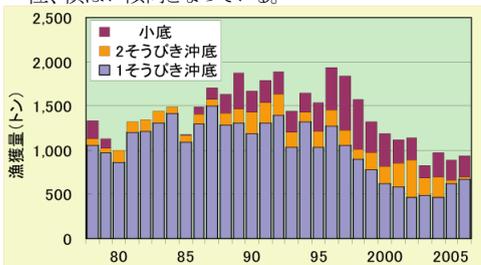


## 漁業の特徴

漁場の中心は、伊豆半島以西~九州太平洋側の水深200~250mの海底付近で、主に1そうびき沖底びき網(沖底)により漁獲される。金華山~房総沖の漁場については資料はないが漁獲量は少ない。その他、2そうびき沖底、小型底びき網(小底)によっても漁獲される。2そうびき沖底の着業隻数が大幅に減少したため、当該漁業種類による漁獲割合は急減した。

## 漁獲の動向

漁獲量は1980年代後半から増加傾向となり1992年には1,892トンに達した。その後、やや減少したが1996年には1,936トンと過去27年間(1980~2006年)で最高の漁獲量となった。しかし、その後は減少に転じ、2003年には833トンと最も少ない漁獲量を記録し、2004年以降やや増加したが2006年には941トンであり依然として1,000トン未満の低位、横ばい傾向となっている。

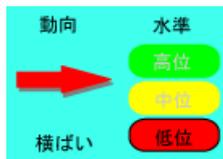


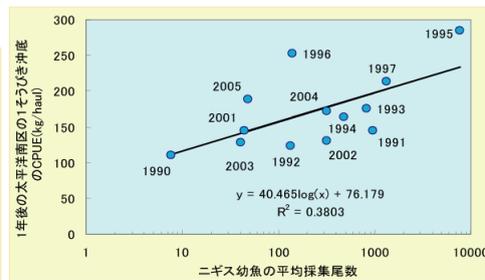
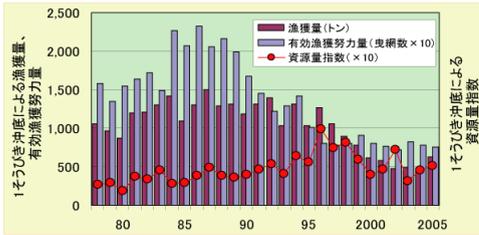
## 資源評価法

総漁獲量、本種を主要な漁獲対象とする1そうびき沖底の資源動向の指標及び調査船による幼稚魚調査の結果をもとに資源評価を行った。1そうびき沖底の主要な漁場である土佐沖と熊野灘での漁獲量、有効漁獲努力量及び資源量指数の経年的変化傾向から資源の状態を評価した。さらに、土佐湾における調査船調査による6~7月の幼稚魚の分布量指数と翌年の太平洋南区の1そうびき沖底のCPUEの間に有意な相関関係が認められ、これらから2008年の漁獲量の動向を予測した。

## 資源状態

土佐沖における1そうびき沖底の資源量指数は1980年代半ばをピークに減少傾向にあり、1990年代半ばの漁獲量の増加は、本種の資源量の増加と努力量の積極的な投下によるものと考えられる。1997年以降の漁獲量の急減は、資源量が低下したことと、着業統数が減少したためと考えられる。近年では、低位・横ばいとなっている。一方、熊野灘における1そうびき沖底の漁獲量は近年、低位・横ばいである。資源量指数は、1990年代半ば以降、ほぼ横ばい状態にある。





### 管理方策

主力漁業である1そうびき沖底の漁獲量はやや増加したが資源が回復するまでには至らず、漁獲を抑制して資源を増加傾向に転じさせることを目標とする。現在、利用できる情報は漁獲量だけであることから、低位・横ばい傾向にあった過去3年間(2004～2006年)の平均漁獲量の9割を2008年のABClimitとした。2007年6～7月に行った調査船による幼稚魚調査の結果によると、分布量指数は2006年より大幅に減少し、2008年漁期の漁獲量が回復する可能性は低いと考えられる。そこで、ABCtargetはABClimitに安全率0.8を乗じて算定した。

	2008年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	841トン	0.9Cave3-yr	-	-
ABCtarget	673トン	0.8・0.9Cave3-yr	-	-

- 資源の水準・動向は、低位・横ばい傾向
- 漁獲量を増加傾向に転じさせることを管理目標とする

### 資源評価のまとめ

- 1997年以降の総漁獲量は減少傾向が続いていたが、近年では低位・横ばい傾向
- 2006年の総漁獲量は941トンで、2005年の888トンを若干上回る程度
- 2そうびき沖底の稼働隻数が大幅に減少したことにより、本漁業種類の漁獲量が激減
- 資源の水準・動向は、低位・横ばい傾向

### 管理方策のまとめ

- 漁獲を抑制して資源を増加傾向に転じさせる
- 資源予測については、調査船による幼稚魚の分布量指数等のデータを蓄積して、推定精度の向上を図る

資源評価は毎年更新されます。